



まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

関西元気企業

～企業は「人財」が創る～

「人は城 人は石垣 人は堀」。強固な城がこぞって築かれていた戦国時代、大名・武田信玄が言ったとされる言葉です。曰く「人は用い方によっては城にも石垣にも堀にも成り得る戦力である。個人の力を見抜いて、彼らの才能が十分に発揮出来る集団とすることが大切である」。

今回は、研磨材に食品素材を用いるという独自のアイデアのもと、業界では不可能と言われた複雑な形状の金属まで磨き上げる鏡面加工機械「エアロラップ」を開発された株式会社ヤマシタワークスの山下社長にお話をお伺いしました。これまでの道のりと、社員との関わり合いを大切にしておられる山下社長流の人材育成の秘訣に迫ります。

●起業の動機は。

原点は子どもの頃の憧れですね。私は運送屋の敷地の中にある長屋で生まれ育ったのですが、その運送屋の社長さんは、よくお小遣いをくれる優しいおじさんでした。その一方で運転手のお兄さん達をあごで使ったり叱ったりしているのを見て、子ども心に「『社長』というのはすごくお金持ちで強くて偉い人なんだ。僕も大きくなったら社長になろう！」と憧れるようになりました。

結構やんちゃな高校生になってもその思いは変わらず、ろくに学校にも行かない仲間と集まっては、「棟梁でも親方でも何でもいいから、人の上に立って指示する立場になろうぜ！」と語り合ったりしていました。

やがて、高校も卒業に近づき、私は大手製菓会社の入社試験を受けました。筆記試験はそこそこできましたし、面接もとても良くできました。まあ、多少やんちゃでしたが、柔道や空手の大会で入賞歴もあり、受かる自信はあったのです。しかし、結果はまさかの不採用。自宅と高校に不採用通知が送られてきました。私は悔しさと絶望で、毎日深夜まで遊び回るようになりました。後で知ったのですが、私がそうしてやさぐれている間に、結果に納得できなかった先生が、会社に日参して不採用の理由を聞き出してくれました。そして、本当の理由が「健康診断の結果が正常値より少し高い」という健康上のものだけであることを知った先生は、必死で会社を説き伏せ、私の入社を認めさせたのです。

後日、先生から入社が認められたことを聞いた私は、内心すごく嬉しかったのですが、一度不採用となっている手前素直に喜ばず、「俺は行かん。そんなに行きたいんやったら先生が行ったらええやんか！」と粹がりました。しかし先生から「お前は身体上の偏見だけで落とされたんや。入っ

企業情報

名称 株式会社ヤマシタワークス

所在地 兵庫県尼崎市西長洲町2丁目6番18号

設立 1989年 創業者 山下 健治

グループ従業員 118名 資本金 10百万円

H P <http://www.yamashitaworks.co.jp/jp/index.html>



株式会社ヤマシタワークス 山下社長

て見返してやらんかい！」と言われ、初めて不採用の理由を知った私。「今に見てろよ」という気持ちと、「すぐ辞めて独立してやる！」という相反する気持ちが芽生えました。無茶苦茶でしょ(笑)。それから6年間、その会社でがむしゃらに働きました。社内で表彰された時には、社内報を持って、先生に報告に行きましたね。

●実際に起業されるまでの経緯を教えてください。

まだ私が会社員だった頃、父は小さな町工場で働いていたのですが、車の免許を持っていなかったので、私が代わりに運転して、納品作業だけ手伝っていました。何度も親会社(めっき加工業)の社長に会っているうちに仲良くなり、「ケンちゃん、うちの下請けをやらへんか？」と誘われました。先にお話ししたとおり、「いつかは独立を」と思っていましたので、この誘いに応じ、知人2人に声をかけて、金型の研磨作業の構内下請という形で創業しました。親会社が営業して持ってきた金型を私たちが磨き、その後親会社がそれをめっき加工して出荷するといった流れです。

しかし、構内下請では金型を磨くだけで、いわば黒子です。「磨くだけでは物足りないなぁ、自分でモノを作りたいなぁ」という気持ちが出てきて、そのうち「この金型を自分たちで作れないだろうか」と思い始めました。そこで、金型製造に使う機械のメーカーに見学に行きました。営業が機械の使い方をプレゼンしてくれたのですが、「ここに数字を入れるでしょ。で、このボタンを押すと…出来るのです」と流れるような説明。「簡単やん！」と思い切って多額の借金をし、その機械を購入。賃貸ながら自社工場を構え、研磨作業だけではなく金型そのものの製造も始めることにしました。従業員は数人でしたが、これで晴れて「社長」となったわけです。

●自社工場を作られた後は順調に行ったのですか。

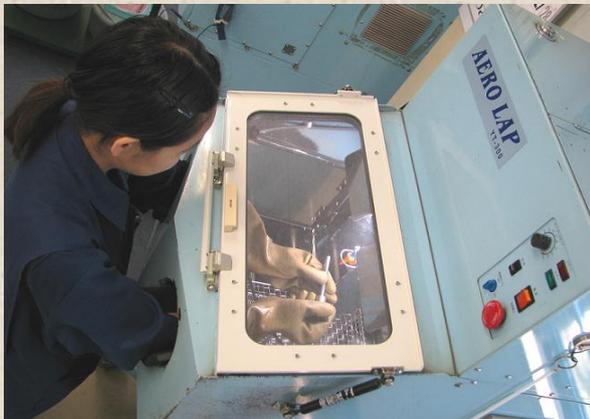
ところが、簡単だと思っていた金型製造には相当のノウハウが必要だと気付きます。ミクロンの精度が求められるモノをどうすれば作れるのか全くわからない状況で、もちろん売り物になる金型など作れるはずありません。ちょうど景気の良い時期でしたので、周りから「金型を作ってほしい」と仕事の依頼だけはどんどん舞い込んできます。しかし、一つも金型を作ることが出来ず、売上ゼロで、毎月多額の借金の返済と従業員への給料の支払だけが続くという辛い日々でした。さらにその頃は、長男が生まれたばかりで、マンションも購入していたのでそちらの返済にも追われる日々。お先真っ暗で、夜、布団に入っても体が宙に浮いたような感覚がして、生きた心地がしませんでした。「欲を出したばかりに。俺はなんてバカなことをしてしまったんや」と激しく後悔し、マンションのベランダから外を見て、「こっから飛び降りたらどんだけ楽かな」とまで考えることもありました。

そんな地獄のような生活が半年くらい続いた頃、心身ともに疲れ果てた私を心配した親会社の社長が「ケンちゃん、真っ青な顔してどないしたんや？何でもやったるから言えよ」と声をかけてくれました。自然と涙が溢れました。私の話を全て聞くと、「機械の金か？それなら俺が払ったるやんか」と言ってくれたのです。「ちゃうんですよ…どうしたら作れるか知りたいだけなんです…」と、可能であれば、この機械で金型を作っている工場に行って、機械の使い方や金型作りのノウハウを勉強したいとお願いしました。「ケンちゃん、簡単や。今すぐにやったる」と、すぐに知り合いである東大阪の工場に連絡し、機械の使い方や金型製造のノウハウを教えてもらえるよう、話をつけてくれたのです。それから1週間、死に物狂いですべてを吸収して、金型作りの基本をマスターし、自分の工場に戻りました。それからは自分の工場で金型が作れるようになり、経営が成り立つようになりました。この時、親会社の社長が手を差し伸べてくれていなければ、今の私は無かったですよ。

●その後、社長は「エアロラップ」を開発されましたが、そのアイデアの原点は。

従来の研磨作業はほとんど手作業でしたので、危険な上、肩は凝るし、一日中座って磨き続けることもあるなど、重労働でした。「これ、どうにか機械で出来んかなあ」と思っていました。当時の業界の常識では複雑な形状の金型を全て機械で磨くという事は不可能とされていました。それを可能にした革新的な技術が鏡面加工機械「エアロラップ」です。

このアイデアの原点は二つあります。一つは子どもの頃から「ものづくり」が好きだったことです。よく父に教えてもらっており、木を削って剣を作ったり、鳥かごを作ったりしたのを覚えています。



▲ エアロラップによる作業風景。熟練の技が必要だった金型研磨が容易に行える。

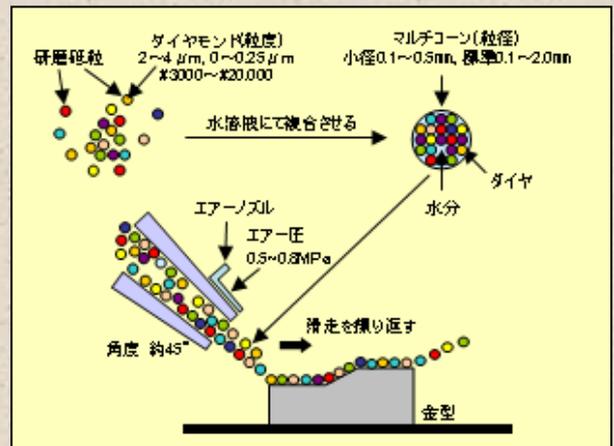
「今に見てろよ！」と思って入社したので、とにかく目立ちたかったんです（笑）。でも、今思えば、日頃から現状に飽き足らず、「何か改善できることはないか」と貪欲にアイデアを出す訓練をしていたことが、後々エアロラップ開発に繋がったのだと思います。

●社長の経営理念を教えてください。

社員と、その家族が幸せであれば、その企業は発展し続けると考えています。そして、社員が家庭で、職場で正しい位置にいるかどうか、見極めて指示をするのが経営者の仕事だと思っています。だから私の日々の仕事は会社の中を歩き回っては、社員に声をかけること（笑）。それと飲みニケーションですね。

社員とは本当によく飲みに行きます。仕事の話は一切しません。楽しい飲み会ですよ。でも、社員がプライベートでどんな悩みを抱えているかは、きっちり把握しています。そうすれば、例えば社員が望まない配置転換をしなくて済みます。能力上の適性とか、会社の目先の業績より、社員の幸せの方が大切ですからね。社長仲間で飲んだ時、よく言います。「接待、接待で他所で飲むより、社員と飲んだ方が、よっぽど会社のためになるぞ」と。

こうした私のやり方は、部下がちゃんと踏襲してくれています。45歳の層が、35歳の層が、



▲ 水を含有することで弾力性及び粘着性を有し、研磨砥粒を複合させた研磨材（マルチコーン）を被加材の表面を高速で滑走させて発生する摩擦力により磨く。

そして、もう一つは製菓会社での経験です。エアロラップの技術の核である「研磨材に食品素材を用いる」という発想は製菓会社での経験を元に思いついたものですし、また、そのような技術的な部分だけではなく、メンタル的な部分でも製菓会社での経験が活きたと思います。というのも、その会社では毎月社内報が発行されており、その中で「業務改善提案」の投稿事例が紹介されていました。私はどうしてもこの社内報に載りたかったため、毎月何かしらの提案をし続け、何度か社長表彰も受けました。



下の者を飲み連れて行っては、「ちょっとこいつの話を聞いてやってください」と言ってきます。それはとてもうれしいことですね。私が「飲みニケーションで人材育成している」と言っただけからではないのは、こんな風に、ついてきてくれる社員の存在があるからです。

おかげで、みな楽しく伸び伸びと働いてくれています。当社に一步入れば、アットホームで活気あふれる職場の雰囲気を感じてもらえるでしょう。

●今後の夢は。

私自身大きな夢というものはありませんが、社員には夢とモチベーションを持って働いて欲しいと思っています。その一環として、当社はそれぞれ専門分野に特化した関連会社を4社設立しており、当社社員を社長に抜擢しています。ある関連会社では夜な夜な飲みニケーションを頻繁に行い、「エアロラップを超えるすごい機械を作ってやろうぜ!」と夢を語り合っているらしいですよ。頼もしい限りです。頑張ってくれば誰にでも関連会社の社長を任せようと思っていますし、若い社員が「俺も社長になってやる!」と夢を持って生き活きと仕事に取り組んでくれたらいいですね。そういった環境があれば、人材は自然と育っていくものだと考えています。

そして何より、社員が幸せな家庭を築いていく姿を見たいですね。当社には若い社員が多く、色んな子がいます。勤労学生もいますし、その辺でたむろしている高校生を「ぶらぶらしてるんやったらうちに来て働け!」と言って連れてきたこともあります(笑)。私自身が若い頃たくさんの方に助けていただいて今の生活があるように、ヤマシタワークスという会社が彼らに夢とモチベーションを与え、幸せな将来への架け橋となり、夢の実現の舞台ともなれば、こんな嬉しいことはありません。

<取材後記>

幼少の頃から一貫して「社長になりたい」という憧れを持ち続けてこられた山下社長。それを成し遂げ、逆境にも負けず乗り越えられたそのバイタリティに驚かされました。

また、取材時には笑顔で気さくにお話しいただき、とても親しみやすいお人柄で、そんな社長に見守られて社内の雰囲気も非常に良く、皆さん生き活きと仕事をしておられるように感じました。

どこか“アニキ”のような雰囲気を醸し出す社長が作り出す風通しの良い職場環境の中で、人材が育っていき、さらなる会社の発展や技術の開発を生む原動力になる。特許や技術だけではなく、そのような“人”もかけがえのない会社の財産になるという社長の理念に、深く感銘を受けました。

(近畿財務局総務課 M.J)

掲載している情報は、平成26年8月時点のものです。

掲載している写真は、同社よりご提供いただいた写真又は同社了解のうえ同社ホームページ内の写真を掲載しております。